

思い出のビー玉戻った

米からの物資 本川小元教諭65年保管

中区 家族が100個寄贈

米国の教会が1947年、広島原爆の爆心地に近い本川小（広島市中区）に支援物資として贈ったビー玉約100個を保管していた当時の教諭賀屋進さん（2010年に85歳で死去）の家族が4日、ビー玉を同小と当時の児童に寄贈した。賀屋さんが「子どもがのみ込むと危ない」と65年間、瓶に入れて自宅に置いていた。

赤、青、黄などの模様が入ったビー玉は、文房具などとともに同

小に届いた。家族によ

ると、進さんは児童に少し遊ばせた後、自宅に保管した。

この日、進さんの長女貴美子さん（38）と次女公美子さん（37）は、玉は河野一則校長（56）に贈った。同小の平和資料館で展示される。貴美子さんは「子ども思いの父も喜んでい

た。寄贈を仲介したのは米国在住の舞台芸術家重藤マナレ静美さん（62）。支援物資のお礼に、描いた絵などを送った児童と教会との交流を描くドキュメンタリー映画の撮影中に賀屋さんに会い、ビー玉の存在を知った。当時の在校生が「珍しい模様に憧れた」と思い出しては話すのを聞き、寄贈を持ち掛け

（長久豪佑）



貴美子さん（右）たちが寄贈したビー玉入りの瓶を見つめ、当時の思い出を語る石田さん